

草の芽句会たより

NO,90
28,2,4

搦手へまわれれば温し石畳

貞子

噴水のしぶき軽ろやか春の来る

立春や木の間に凜と城の見ゆ

純子

枯木々のふくらむ気配帯曲輪

そびえ立つ城壁にそそぐ春日さし

節子

友と食ぶ卓袱うどん雪もよい

睦まじき鳩のつがいと日向ぼこ

禮子

空青し立春の城仰ぎけり

老梅のやさしき影をつくりたる

剋子

水仙の同じ高さに蕾かな

喪に籠る姪に見舞の寒卵

貞

大寒や日の射しつつも風荒ぶ

白梅に枯れてぶらぶら烏瓜

範子

孫たちに海苔炊く磯の香りかな

立春の山脈近く見えにけり

文子

入院の長びく窓に月凍てて

出席者 川原 森 氏家 馬場 小山

投句者 真鍋 吉崎 大黒

今日は立春、冷たい風の中にも春を待つ木々の息吹が感じられる。

大手門にはユリカモメや鳩が群れ遊び、見上げる石垣の果てには青く晴れた大空がどこまでも広がる。なんていいお天気！

梅林では紅梅が満開に花を咲かせ、訪れる人たちを楽しませている。

出席者が少ない分お喋りで補って、いつも通りの賑やかな句会となった。

次回は三月、芽吹き始める城山の散策を楽しみにしたい。

